

淡路の害虫

その② サンカメイガ (*Schoenobius incertulas* Walker)

藤 富 正 昭

サンカメイガ (イッテンオオメイガ, 幼虫のことをサンカメイチュウと呼んでいる。) は、九州南部から紀伊半島南部にかけての温暖な地方の水田で生息し、年2～3世代の生活環をもつ水稲単食性の害虫である。

淡路島における初発見は、記録によると、明治33年秋現在の南淡町福良、阿万においてである。そして翌明治34年には、現在の北淡町室津をはじめ津名郡各地でみつかり、おそらく明治30年代初め頃に、四国より分布圏が拡大したものと考えられる。

淡路島へ侵入して以来、発生の多少はあったものの、分布圏を拡大し、昭和25年には、明石で確認されるに至った。この頃、淡路島におけるサンカメイガの激しい被害が島内各地でみられ、兵庫県は「淡路島に於ける三化めい虫絶滅対策」を実施した。当時の様子を記録した雑誌「植物防疫」(Vol.7 No. 8～9) をみると、米の生産拡大が、国策の中心課題の1つであり、米の消費が減って水田転作が奨励される昨今と比ぶべきもない。

昭和26～27年に実施されたこの事業は、何千年も続いた淡路の水稲作付体系を根底からくつがえし、完璧な作付統制を実施し、サンカメイガの撲滅をはかろうとしたものであり、農家や市町村そして新聞も、厳しい統制の実施に反発したが、農業改良普及員や農業委員の不眠不休の努力で、実施に移された。作付統制の第1は、全島の田植時期を6月25日以降とした。このため島外から1000名を越える早乙女が動員された。そして第2点は、DDT乳剤の4～5日毎に6回連続散布の実施である。

現在の農業安全使用の考え方からみると、背筋の寒くなるような使用が行なわれた。

ともあれ、徹底的な絶滅対策の実施により、淡路のサンカメイガは、昭和27年ほぼ絶滅したと記録されている。

それ以後、淡路島のサンカメイガの発生は、ほとんどみられず、今日に至っている。

今日、淡路にサンカメイガは、いないのかといえば、そうでない。昭和26～27年のこの事業の網をくぐり、そしてその後の稲作の大きな変化に耐えて生き残ったサンカメイチュウが、淡路島の北端、淡路町田之代地区の棚田に細々と生残っている。

淡路町のサンカメイガは、全国のサンカメイガの分布圏の北限ではないかと思われ、その意味では貴重な存在である。